

生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育てる授業のあり方

学習開発分野 (22821045) 斎 藤 千 愛

ドイツでは、成人が仲間とともに日常生活の中でスポーツに触れ、楽しもうとするスポーツ文化を形成している。それに比べて日本では、成人の運動習慣が乏しく、スポーツを文化として感じるものが不足していることは、様々な調査から明らかである。ここから日本において、スポーツ文化を形成することが喫緊の課題である。本研究では、スポーツ文化に関する文献調査や生涯スポーツにつなげる視点で学校において授業実践を行い、これらを分析・検討した。この結果から、体育授業で、生徒自身の課題解決活動や一人一人に合った支援などがスポーツ文化を形成することに効果的であることを明らかにした。

[キーワード] スポーツ文化, スポーツへの多様な関わり方, 体育授業

1 問題と目的

厚生労働省(2012)は、国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針として「二十一世紀における第二次国民健康づくり運動：健康日本 21(第二次)」を告示した。2013 年より取り組みをスタートさせ、目標設定後 10 年を目途に最終評価を行った。2023 年に行った最終評価では、「日常生活における歩数の増加」「運動習慣者の割合の増加」の項目は、横ばいから減少方向であったことが明らかになっている。

さらに、厚生労働省(2023)は、我が国の「健康づくりのための身体活動・運動ガイド 2023(案)」の中で、令和元年の国民健康・栄養調査において、20 歳以上の運動習慣について、20 歳以上で運動を継続している割合は、4 人に 1 人であることが明らかである。

一方で、文部科学省は中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説保健体育編では、保健体育科の目標として、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」と記されている。ここで示す資質・能力とは、運動を行うことの楽しさや喜びを味わう態度や意欲、知識や技能などのことを指し、この資質・能力を実生活や実社会で生かすことを目指したものである、としている。つまり、中学校の体育授業の目標は、運動の楽しさや喜びを味わい、学校卒業後も運動やスポーツに関わることでであると解釈できる。すなわち、中学校の体育授業で運動やスポーツの楽

しさを味わうことは、成人の運動習慣の改善につながるものであるはずではないだろうか。

しかし、先に述べたように、20 歳以上の運動習慣は改善されていないということが、調査結果から明らかになっている。ここから、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育てることを目的としている学校体育が、実際にはこれらに貢献できていないのではないかとすることを指摘できるのではないか。

よって本研究では、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育てる体育授業がどうあるべきかを分析・検討することを目的とする。

本研究では、基礎研究と調査研究の授業実践を行う。基礎研究では、文献調査を行う。文献調査では、人々の生活にスポーツが文化として根付いているドイツのスポーツ文化について諸文献を調査し、我が国のスポーツ文化や体育授業と比較する。その上で、我が国の体育授業を観察し、課題と現状を明確にしたうえで、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育てる体育授業のあり方を検討する。調査研究では、中学校で授業実践を行い、基礎研究で検討したことを踏まえ、生徒の学習カードによる振り返りや授業時の姿から授業のあり方を分析・検討する。

2 ドイツのスポーツ文化について

東洋経済オンラインの記事『日本とドイツの「スポーツの位置付け」こんなに違う』において、ドイツでは一緒に活動する仲間(「スポーツクラブ」)

とともに日常生活の中でスポーツ文化を形成している、としている。つまり、ドイツでは「スポーツクラブ」が、豊かな社会を創ることや、コミュニティを一つにまとめることに貢献している、と指摘しているのである。

また、高松(2020)は、ドイツのスポーツクラブは、「フェライン」という、市民の参加による組織形態であり、ドイツ最古のフェラインは社会全体をよくしていくことを目的としたものであると説明している。ここからドイツのスポーツクラブは、市民の社会参加によって組織され、社会全体の繁栄を目指したものである。つまりドイツでは、スポーツが市民が参加してつくる「文化」として成立していることを指摘できるのである。

3 日本のスポーツ文化について

(1) 成人の運動習慣と学校体育の関係性について

日本体育学会(2010)は、日本の国民のスポーツの質的な問題を挙げ、それは現代にも続いている、と示している。さらに、「生涯スポーツ」は、「スポーツによる暮らし」のあり方やスポーツの質について考えたうえでスポーツに関わることであるが、ここに問題があるため、我が国は、「生涯スポーツ」が確立しないとしている。

林田・清水(2021)は、「スポーツライフキャリア(SLC)」(スポーツを長期にわたって積み上げてきた経験)と名付けたものに注目し、その中で「青少年期のSLCからみた成人期のスポーツ実施の傾向」として、運動部活に属していた人よりも、様々なスポーツに様々な場面に関わった人の方が成人でもスポーツを継続している、としている。ここから学校でのスポーツ経験が多様な人は成人でもスポーツ文化に触れている、と解釈でき、様々なスポーツを経験することが可能であれば、成人期におけるスポーツ実施においてきっかけとなることを指摘できるのである。

では、学生時代の体育授業の経験者は、学生時代に受けた体育授業にどのような印象を持っているのだろうか。

坂本(2023)は、教員を目指す大学生に自身の体育学習経験を基に、「体育嫌い」について語り合うことを指示した。その中で「体育が嫌いになった理由」という項目について、学生の答えは、「みんなと同じようにすること」「みんなの前で運動すること」「周りと比べること」を求められたことを体

育が嫌いになった理由としている。

よって、次のようなことが仮説として立てられる。①学校体育授業が運動習慣に影響を与えている②学校体育授業が運動好きに肯定的に働いたり、否定的に働いたりする③学校体育授業により運動継続につながる可能性は低い。以上のことを本研究の仮説とする。また、学校を中学校に設定することとする。

(2) 運動習慣と中学校体育授業に関するアンケート調査

本研究では、「体育授業が生涯スポーツに与える影響」について山形県近郊の20代の成人女性を対象にアンケート調査を実施した。前節で述べた仮説に沿って調査を進めたものである。調査方法は、グーグルフォームによるものである。調査実施期間は、2023年12月11日から2023年12月20日。筆者の中学校や高校在籍時の同級生、筆者が大学在籍時に所属していたサッカークラブのメンバー、大学在学時の学友等を対象にした。

依頼総数は87件であり、回答総数は65件であった。アンケート調査の結果は以下のようになった。

(1) あなたの普段の生活の中での運動の関わり方について質問します。現在(過去1年間以内)どのくらいの頻度で運動・スポーツをしていますか？ここで言う運動とは、20分以上、目的をもった身体活動のことです。



図1 アンケート調査(1)

(1)では、「週3回以上」は4人(6.3%)、「週1〜2回程度」12人(19%)、「月1〜2回程度」10人(15.9%)、「2, 3か月に1回」11人(17.5%)、「ほとんどしない」26人(41.3%)であった。厚生労働省が示す運動習慣者の基準より、「月1〜2回程度」「2, 3か月に1回」「ほとんどしない」と回答した人たちは、運動習慣者とはいえない。よって、

「週 3 回以上」「週 1～2 回程度」と回答した運動習慣者は約 25%であり、この調査で研究対象とした成人女性の約 75%が運動習慣がないといえる。

(2) (1)で「週 3 回以上」「週 1～2 回程度」と回答した人に聞きます。運動を継続している動機として最も当てはまるものを 1 つ教えてください。



図 2 アンケート調査(2)

(2)では、「健康維持のため」「ダイエットや美容のため」が合わせて 11 人(52.3%)、「学生時代の延長として楽しむため(続けるため)」が 4 人(19%)、「大会に出場するため」「その他(授業の体育)」がいずれも 1 人(4.8%)であった。この結果には、(1)の回答において、「運動習慣者とはいえない 5 人」の回答も含まれている。この 5 人の内訳として「ストレス発散のため」と回答した 4 人と「ダイエットや美容のため」と回答した 1 名となる。(1)の回答で、「月 1～2 回程度」と回答した人は全員が、「健康維持のため」「ダイエットや美容のため」を選んでいく。これは、成人女性が運動を行う理由として予想された回答であり、運動やスポーツを通して得られる価値を重視したものである。運動内容はジョギングや筋肉トレーニングなどのトレーニング系の運動がこれに想定されるものである。(2)の回答で注目したいのが「学生時代の延長として楽しむため(続けるため)」を回答した人が 4 人いる、ということである。これは、「運動をすることそれ自体を楽しむ」ことであり、「生涯スポーツ」として日本体育学会や厚生労働省が求めたい姿である。

また、「その他(体育の授業)」と回答した人は、大学生であり、大学の授業で行っているということだと想定される。

(7)体育授業がもっとこうであつたら良かったなと思うことを教えてください。

これは、自由記述式の回答である。この質問からは、体育の授業に対する本音を見出すことができ

た。回答は全部で 47 件である。この 47 件の回答は次の 5 つのタイプに分類される。

- A: 苦手な人も楽しめる授業 12 件
- B: 自分たちで作り上げる授業 11 件
- C: 専門的な技術向上 10 件
- D: 運動することそれ自体を楽しむ授業 7 件
- E: その他(「もっと長い時間がいい」「寒さや暑さに快適にできる」) 2 件

以下は、これらの回答の実際の記述である。A は「勝ち負けや、得意不得意に関わらずみんなが楽しめる授業」「運動の苦手な子どもも楽しめる授業」、B は「好きな種目に取り組める」「生徒同士で教えあつたことが未だに覚えているので、そういう時間がどんな種目でもあるといい」、C は「技能の指導が少なかったように思うので、全ての領域で専門的に技能を学べる環境が欲しかった」「コツや原理などを教わる時間をもっと増やしてほしい」、D は「いろんな競技に触れる機会や、先生からの評価などを気にせずスポーツそのものを楽しむ雰囲気があれば面白かったのかなと感じる」「差が大きかったので、そこをうまくできたら、もっとみんな楽しくできたのかなと思います」であった。

A のタイプが 12 件と一番多かった。体育は、得意不得意が見えやすいという認識が多いため、だからこそ誰もが楽しめる授業であつたらよかったという内容であった。B と D は共通する内容であり、いずれも自分で好きなスポーツを楽しみたかったということである。C は運動を「する」ことに注目した内容であった。

これらのことから、中学校の体育授業が良い思い出であつたとはいっても、これだけの課題点が浮き彫りになった。すなわち、運動をすることそれ自体を楽しむ授業にはなっていなかったことが読み取れる。

では、これらの課題を解決するためにどのような体育授業が必要となるのだろうか。この点について次章で検討する。

4 中学校体育授業の課題と現状

(1) 中学校体育授業の課題

中村(1992)は、「へた」という暗黙の了解を生み出すスポーツとは何なのか、と疑問を述べ、スポーツの中に「うまい」「へた」が生まれることを疑問視している。さらに、中村は、「疎外を生み出す

スポーツ」について、スポーツ能力の低さ等によって、「劣等感」や「敗北感」を味わわせるというマイナス面がある、と述べ、スポーツは、本来の目的とは逆のことが生み出されている、としている。ここから、本来は人間の生活を明るく豊かにするものであるスポーツが、本来あるべきスポーツとそうではないようなスポーツの2つがあり、後者がよく認識されてしまっていることが問題である。スポーツや体育の授業は、前者であるべきなのではないだろうか。

このような問題を解決するために、指導者という立場からスポーツを考えていく。

日本のサッカー指導者であり、日本人女性初のスペインでのプロサッカーチームの監督就任の経験がある佐伯は、指導者は、選手の学びの機会を創出するファシリテーターであり、活動の主体は選手である、と述べている。ここから、指導者の役割として、ファシリテーターであることだけでなく、子どもが主体的に考えて動くことができるように、そのための学びの機会を与えることが大切である。

(2) 中学校体育授業の提案

これらのことより、以下の3つの視点で体育授業を提案する。

- ①自分の課題を持ち、その解決に迫ること
- ②一人一人の特性に合った支援をすること
- ③生徒とともに授業を作っていくこと

5 授業実践の検討

(1) 調査の概要

①対象生徒

日時：2023年10月10日～11月7日の4週間。

対象：Y中学校 第2学年1組 25名

(男子12名 女子13名)

指導単元：球技「バスケットボール」

第2学年は1組の保健体育の授業は、1クラス単体の男女共修で行われている。

(2) 「PASS 評定尺度」による調査

米本(2014)は、PASS 理論を、情報を認知し処理する様子を整理したものであり、4つのプロセスに基づいているものとする。4つのプロセスは、プランニング、注意、同時処理、継次処理である。大江(2020)はこの4つのプロセスを以下のように整理している。①プランニング…提示された情報に対して、どのような課題なのかを判断し、効果

的な解決方法を決定、選択、使用する認知処理過程。進行状況を確認し、必要に応じて新しい方法を生み出す過程・能力。②注意…提示された情報に対して、特定のものや刺激に選択的に注意を向け、不要なものには注意を向けない過程・能力。③同時処理…提示された複数の情報を、全体としてどのように関連付けられるかを理解し、まとまりとして統合する認知活動の過程・能力。④継次処理…提示された複数の情報を、系列順序として統合する認知活動の過程・能力。このPASS 評定尺度で生徒一人一人の能力を理解し、生徒一人一人に最適な支援をすることが可能となる。

本研究では、松尾(2017)の「PASS 評定尺度」にある項目を援用して、表1に示したように使用した。これを実施するにあたり、2学年1組の担任教諭と生徒についての協議を行い、筆者がそれらを参考に、生徒の個別の状況についてPASS 評定尺度の項目内容に沿って評価することとした。評価場面としては、様々な教科の授業や学級活動、学校生活の姿を観察した。評価方法は、筆者が表1の項目に沿って生徒を観察し、行動の出現頻度によって点数を記録した。

表1 本研究で使った PASS 評定尺度

	よくある	ある	たまにある	ない
プランニング (Planning)				
P1 活動する前、やり方を考える。話し合いや意見交換をする。				
P2 活動する前に、やり方や必要なものを確認する。				
P3 話し合い、意見交換などから、活動のやり方を決める。				
P4 活動の途中で状況の変化を察知し、自分の意見を述べて、やり方や意見を調整する。				
P5 活動する前に考える。				
P6 様々なアイデアを出す。				
注意 (Attention)				
A1 他者の発言や行動に、自分の発言や行動を合わせていく。				
A2 他者の発言や行動に、自分の発言や行動を合わせていく。				
A3 他者の発言や行動に、自分の発言や行動を合わせていく。				
A4 他者の発言や行動に、自分の発言や行動を合わせていく。				
A5 他者の発言や行動に、自分の発言や行動を合わせていく。				
A6 他者の発言や行動に、自分の発言や行動を合わせていく。				
同時処理 (Simultaneous)				
S1 いくつかの情報を同時に処理して理解することや得意である。				
S2 ものごとく処理しているところや同じところを見つけて、仲間分けすることが得意である。				
S3 1つも2つものことを同時に処理することができる。				
S4 一度にたくさんのことを覚えても、その内容をよく覚える。				
S5 お手帳やメモ、お手帳などに情報を整理することができる。				
S6 情報を整理してから、必要な情報にアクセスする。				
継次処理 (Successive)				
Sa1 作業の順序や計画の順序などを自分で考えて、作業することができる。				
Sa2 作業の順序や計画の順序などを自分で考えて、作業することができる。				
Sa3 作業の順序や計画の順序などを自分で考えて、作業することができる。				
Sa4 作業の順序や計画の順序などを自分で考えて、作業することができる。				
Sa5 作業の順序や計画の順序などを自分で考えて、作業することができる。				
Sa6 作業の順序や計画の順序などを自分で考えて、作業することができる。				

「よくある(3点)」「ある(2点)」「たまにある(1点)」「ない(0点)」の4件法で記録し、最小値は0

点, 最大値は 18 点と設定した。これら 4 件法の配点により, 合計点数が高いほど, 認知処理能力が優位であると評価する。これによって, 生徒の個別の認知特性を把握することとした。

PASS 評定尺度で生徒を見取った結果, 「継次処理の能力が高く, プランニングの能力が低いこと」「同時処理の生徒の特徴」「注意の生徒の特徴」という観点で生徒を分析することができた。

「継次処理の能力が高く, プランニングの能力が低い」生徒は, 自分たちの経験からプランを立てる力が弱いことや中学校の授業においてこのような力を育てる場が少ないことが, その理由として挙げられる。

以下, 表 2 は, PASS 評定尺度の評価結果である。生徒の得意とする処理能力の項目に色を付けて示

している。生徒によっては, 得意とする処理能力が重複している生徒もいたため, それらの生徒は, 該当する項目に色を付けた。○の表記は女子生徒を表す。

「同時処理の生徒の特徴」として, ゲーム性のあるスポーツを専門にしている生徒が多いことが分かった。生徒○は卓球部, 生徒Ⓜは外部のサッカークラブ, 生徒 T は野球部に所属している。どれもゲーム性のあるスポーツである。ここから, 全体の流れの中で情報を処理する能力が高いと考えられることから, バスケットボールの授業において, ゲームの流れの中で判断し, 考える能力を生かす活動を取り入れると良いと考えられる。

「注意の生徒の特徴」として, 1 つのことに集中して取り組むことで能力を発揮できる。注意の

表 2 PASS 評定尺度評価による個人内得点

生徒	プランニング (P)	注意 (A)	同時処理 (Si)	継次処理 (Su)
Ⓐ	6	10	10	12
Ⓑ	3	11	15	16
Ⓒ	6	12	16	15
D	7	9	15	16
Ⓔ	4	9	15	16
Ⓕ	7	10	12	16
G	3	12	7	7
Ⓖ	4	6	12	17
Ⓖ	6	10	12	17
J	4	8	11	11
K	5	13	10	9
L	6	8	13	15
Ⓜ	5	9	14	12
Ⓝ	6	8	11	14
Ⓓ	8	8	10	15
P	3	6	6	10
Q	3	6	10	13
Ⓡ	7	10	13	16
Ⓔ	5	7	9	14
T	5	9	11	9
U	6	9	7	15
Ⓖ	9	10	12	17
W	4	7	9	12
X	5	12	12	15
Y	9	12	15	16

評価が高かった2人の生徒には、以下のような様子が見られた。生徒Gは教科書や資料集を開くと先生の指示や他の生徒の発言が耳に入らない程、集中して読んでいる姿が頻繁に見られた。生徒Kは、地図帳を使う場面で、1回開いたページをずっと見続けていた。ここから、自分の興味のあることに対して集中して取り組むことが得意であり、バスケットボールの授業において、プレー中のアドバイスではなく、プレー外の時間に、1つのことをアドバイスするような関わり方が適しているのではないかと考えられる。

これらのことから、個々の能力に応じて、個別にアドバイスすることで、個々の能力を最大限に活かして活動ができる。また、このことは、体育授業の提案「②一人一人の特性に合った支援をすること」に活かしていくことができるだろう。

6 授業実践の分析と考察

(1) 自分の課題を持ち、その解決に迫ること

学習カードに自分の課題を書くスペースを設け、自分自身の課題を考える癖をつけることや、自分の課題に対する取り組みをすることを目的として行った。

1時間目の授業の課題は「技術の名称やポイントを理解する」「ウォーミングアップの仕方が分かる」である。授業の最初に、全体で課題を共有した後に、生徒に自分の課題を考えるよう促した。すると、半数程度の生徒が書くことができず、「何書いたらいいか分かんない」「今日はどんなことするんですか?」「やってみないと書けない気がする」という発言があった。授業後に担任の先生に聞いたところ、体育の授業において、自分の課題を考える活動は行ってこなかったと述べていたことから、自分の課題を考えることは、生徒にとって初めての取り組みであり、考える癖が付いていないのだろうと考えられる。また、このことはPASS評定尺度で生徒を見取った際に、プランニングの能力が低いということにも繋がり、見立て通りの結果であった。

しかし、2時間目以降の授業において、自分の課題を持ち、その解決に迫る活動をしている生徒がいた。以下、その2人を取りあげ、詳しく見ていく。

1人目は、生徒⑤である。生徒⑤は、PASS評定尺度の結果、比較的プランニングの能力が高い生

徒である。1時間目と2時間目の学習カードには、以下のように書かれている。

1時間目の振り返りで「どのようにしたら相手がパスをとりやすいかを考えてパス練習をすることができた。シュートがまだ入らないからシュートも入るようにしていきたい。」と振り返っている。2時間目の課題では「相手を取りやすいパスをし、シュートができるようにする。」という課題を立て、振り返りでは「パスをするタイミングや距離などを工夫するといいいパスをまわすことができることを知った。」と書いている。ここから、生徒⑤は、「相手を取りやすいパス回し」という視点で課題を立て、練習やゲームを通して、「パス回し」を意識していることが読みとることができる。

2人目は、生徒⑥である。生徒⑥は、PASS評定尺度の結果、比較的プランニングの能力が低い生徒である。2時間目と3時間目の学習カードには、以下のように書かれている。

2時間目の課題は「シュートをたくさんきめられるようにしたい」という課題を立て、振り返りでは、①「シュートはもう少しうでをあげてできるようにしたいです。」②「パスをするときはボールをもっていない人がいっぱい動けるようにしたいです。」と書いている。3時間目の課題では、前時の振り返りから②の課題を活かし、「ボールを持っていない人が空間に行けるようにしたい。」という課題を立て、振り返りでは、「ボールをもっていない時、もう少し動けたかなと思います。もう少し近くでパスをもらえるようにしたいです。」と書いている。ここから、生徒⑥は、「ボールを持っていない時の動き」という視点で課題を立て、一貫して活動していることが読み取れる。2時間目3時間目の学習課題として「空間」というキーワードをポイントとして自分の課題を見つけ、自分の言葉で課題を立てている姿が見られる。また、3時間目の課題では、ボールを持っていない誰かが空間に移動するという表現をしているのに対して、振り返りでは、自らが移動するという表現に変わっている。課題意識がより自分事に変化したことが読み取れる。

これらから、自分の課題を立てて、その解決を目指した活動をするという取り組みは、Y中の生徒にとって初めての取り組みで最初は難しさや抵抗を感じていたものの、自分で考え、言葉で説明する力を発揮していると解釈できる。教師の指示

を受け身になっているわけではなく、自分たちで工夫して考えていること。このような学習活動は、コルブ、ピーターソン(2018)が提唱した「経験学習サイクル」の過程¹⁾であると指摘できる。

(2) 一人一人の特性に合った支援をすること

PASS 評定尺度で見取った生徒のタイプに沿って一人一人の良さを活かすための最適な声かけを行うことを目的とした。ここでは、集中の評価が高かった生徒 G への支援について分析する。

3 時間目の授業後の生徒 G の振り返りは、「パスをつなぐことができて相手からボールを取るのにしゅうちゅうしている」であった。「集中」タイプの生徒の特徴として、1 つのことに集中して取り組むことができるという特徴がある。よって、この時間に、生徒 G には「1 つの目標を決めてそれだけを意識してゲームしてみよう」という声かけを行った。生徒 G は、DF 面の目標である「相手からボールを奪う」ということに注目し、ゲームを行っていた。振り返りカードからもその様子が読み取れる。自分の特性を自身で把握することは活動するうえで重要なポイントになる。

継次処理の評価が高かった生徒 B への支援について分析する。3 時間目の授業後の生徒 B の振り返りは、「最初のパスをつなぐのはできたけれど、試合になるとどうやって動けばいいかわからなくてうごけなかった。」という振り返りである。「継次処理」タイプの生徒の特徴として、一つ一つの動きを順番に理解していくため、ゲームや試合などの流れの中で、判断して動くことに困難が生じるという特徴がある。よって、生徒 B への支援として、試合をしていない時に、アドバイスをした。生徒 B は、パスをもらうための動き出しはするものの一歩や二歩でやめてしまうため、動きが小さく、なかなかパスがもらえない、試合に参加できないような状況であった。よって、アドバイスとして「動き出しはとってもいいから、動き出したら思い切って三歩くらい大きくダッシュしてみよう」ということを伝えた。試合中は様々なことを考える必要があるため、あえて試合をしていない時間に個別に話をした。すると、徐々に動きが大きくなり、6 時間目の授業では初めてシュートを決めることもできた。

以下の振り返りは、6 時間目の授業後の生徒 B の振り返りである。「今日、あいている所に動くように工夫できたと思います。最後、シュートを決

められたので、最後のバスケもシュートを決められるように練習したいです。」という振り返りであった。最初は自信がなく、動きも小さかったが、自信をつけてきたことが読み取れる。

これらの結果から、PASS 評定尺度で生徒を見とることで、教師が生徒に対して個別支援する際の関わり方に、変化が生じ、その支援の仕方が適切であれば、効果的な支援が可能になるだろう。

(3) 生徒とともに授業をつくっていくこと

単元全体を通したキーワードは「空間」であり、ボールを持たない時の動きとして空間に動いたり、空間にいる味方にパスを出したりすることを課題とした。ゲームは半コートゲームの 3 対 3 を最後の授業まで継続して行う予定を立てた。

4 時間目の授業後に、男子生徒から「先生、ずっと半コートゲームなんですか？」という質問があった。「どうしたい？」と男子生徒の意見を聞いてみると、「最後はオールコートで試合をしたい」と言った。そこで、みんなにも意見を聞いたところ、オールコートでやりたいという生徒がほとんどであり、最終授業のゲームはオールコートで行った。運動量を確保でき、ゲームに夢中になって汗だくになりながらゲームをしていた。この姿から、生徒の意見も取り入れた授業を行うことで、その活動に夢中になって取り組むことに繋がっていくと考えられる。しかし、今回はゲームの仕方を変更したが、「なぜオールコートが良いのか」という理由が大切であるのだろう。

7 本研究の成果と課題

(1) 本研究の成果

本研究では、成人女性の運動習慣の現状から見える中学校の体育授業の課題を明らかにし、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育てる体育授業のあり方について、授業実践・事例検討してきた。本研究の成果を、以下 3 点述べる。

1 点目は、日常生活にスポーツ文化が根付いているドイツを検討することで、スポーツ文化についての理解を深めることができたことである。

2 点目は、成人女性の運動習慣に関するアンケート調査の結果から、中学校の体育授業の課題(誰でも楽しめる授業でなかった、自分たちで作り上げる授業でなかった、専門的な技術が向上できなかった)が明らかになったことである。

3 点目は、中学校の体育授業において、①自分

の課題を持ち、その解決に迫る活動をすること②一人一人の特性に合った支援をすること③生徒とともに授業をつくっていくこと、これらを意識した授業を展開することで、生徒の思考や行動に効果的な変化が生まれることが明らかになったことである。

(2) 本研究の課題

本研究の課題を、以下2点述べる。

1点目は、PASS 評定尺度で生徒を見取る際に、中学校の授業を中心に見取ったことである。座学の授業形態では、生徒の活動内容には大きな制約があり、目に見える部分で評価することに難しさを感じた。PASS 評定尺度で生徒を見取る際には、第4章第2項でも述べているように、これは「日常生活の子どもの行動から評価するものである」としていることから、授業以外の学校生活の姿や友達同士の関わりなど、様々な場面で生徒を見取ることで、より精密に評価することが可能であったのではないかと考えられる。

2点目は、③生徒とともに授業をつくっていくことにおいて、生徒の意見に対して「なぜ」という視点が抜けていたことである。最終授業では「オールコートで試合をしたい」という多数の生徒の意見から、計画を変更した。しかしその際に「なぜオールコートで試合をしたいのか」という質問をしていない。生徒とともに授業を作るうえで一番大切なのは、「なぜ」そのように考えるのか、という部分であるだろう。この意見がただ単に「広いコートで試合をしたい」「オールコートの方が楽しそうだから」というものでは、やりたい人がやりたいように授業を作り上げるものになってしまう。この中に「苦手な人も楽しめるように」「より種目の特性や魅力を経験できるように」という明確な根拠が重要なのである。

注

1) 「経験学習サイクル」は、「具体的経験」「内省的検討」「抽象的概念」「積極的実践」の4つのステップで構成される学習プロセスで、あらゆる場面で何度も使われるものである。

引用文献・参考文献

大江奈緒(2022)「通常の学級における児童の分かり方の特性を活かした教師の支援」, 山形大学大学院教育実践研究科年報第13号(2022)。

ケイ・ピーターソン(2018)『最強の経験学習』, 辰巳出版株式会社。

厚生労働省(2023)「健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023(案)」,

<https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/001171393.pdf>(最終閲覧日2023年12月16日)

小原史朗, 松下智之(2015)「運動・スポーツの習慣化・継続化に関する調査研究」, 『愛知工業大学研究報告 第50号』, 愛知工業大学。

佐伯夕利子(2021)『教えないスキル ビジヤレアルに学ぶ7つの人材育成術』, 株式会社小学館。

坂本一英(2023)『奈良女の体育』, 東洋館出版社。

高松平蔵(2020)『ドイツの学校にはなぜ「部活」がないのか』, 株式会社晃洋書房。

東洋経済オンライン『日本とドイツの「スポーツの位置付け」こんなに違う』, 東洋経済新報社, <https://toyokeizai.net/articles/-/642725>(最終閲覧日2023年12月16日)

中西純司(2012)「文化としてのスポーツ」の価値」, 『人間福祉学研究 第5巻第1号 2012.11』。

中村敏雄(1992)『近代スポーツ批判』, 株式会社三省堂。

日本体育学会 スポーツ振興基本計画特別委員会(2011)「スポーツ振興のあり方について(提言2010)」。

林田敏裕, 清水紀宏(2021)「青少年期のスポーツライフキャリアが成人期のスポーツ実施頻度に与える影響: スポーツに対する意識・態度を媒介として」, 『体育学研究』。

村松照美, 望月宗一郎(2012)「成人期の人々の生活における運動継続の意味」, 『山梨県立大学看護学部 紀要』。

文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編』。

米本伸司(2014)「Planning, Attention, Simultaneous, and Successive processes theory (PASS理論)とCognitive Assessment System (CAS): Das, J. P. と彼の共同研究者による認知理論と評価システムについて」, 『北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学が大学院論集』。

How to Teach a Class that Fosters an Attitude of Lifelong Familiarity with Sports
Chihiro SAITO